

レポート1

大坊山域の「カモシカ」の情報収集について

前略

わたくし、冬季に足山の山域を数回ウォーキングする者です。

去る12月7日(日)午後2時40分頃、右記の略図の場所で「カモシカ」3頭と遭遇しました。

* 親2頭 推定年齢3才 牡の角は3cm前後

* 子1頭 推定年齢1才未満 7ヶ月位

この20年を通じて、はじめて大型獣に遭遇して、感動を覚えました。イノシシは沢山居ると聞いていますが、未だに会ったことがありません。

このカモシカ達は、一過性のものなのか、この山域を棲かとしているのか、情報を集めて、見極めたいと考えます。

一過性ならば、奥山に異変が起きたのか、単なる散歩なのか、見極めたいと考えます。また、この山域を棲かとするならば、餌は、水場は、まためた場(通称砂被り場)は、何処なのか見極められればと、考えます。

そのためには、カモシカをみたよ と言う情報収集が欠かせません。

仮に、この山域を棲かとするなら、国道を通る車の音が聞こえ、ゴルフ場の人の声が聞こえてくるような地域に、カモシカの居住空間があるとは、以外というほかない。

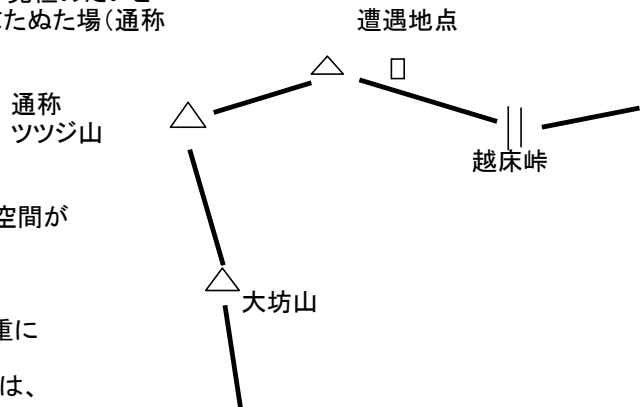
人とカモシカの関係でとらえれば、

1. 遭遇した場合、騒がないこと、餌を与えないこと、の2点を厳重に注意する必要がある。

特に、これからのシーズンは沢山のハイカーが訪れる。そのことは、カモシカと出会う確率が高くなる。

2. 現状の環境を変えないこと、山火事を出さないこと、その他野犬や猟犬を放たないことなど、最新の注意が必要となる。

いずれにせよ、カモシカの居住空間を確保してやるのが大切である。



早々
2008年12月12日記

レポート2

追記

前述のカモシカとの遭遇が気になって、12月13日(土)に、同じコースを歩いた。

大坊山から北に延びる稜線を辿って、注意深く歩いた結果、獣道の入り口で、鮮明な

カモシカの足跡を見出した。これで、カモシカの棲息に確信を持った。

さらに、歩を進めて遭遇地点で、鉱山の社長関野義治氏から貴重な情報を得ることが出来た。

彼の談によると、「カモシカは5～6年前から棲みはじめたこと、鉱山の何カ所かに糞たまりも存在する」とのこと。

この談話により、今回の目的を達した。

それとともに、出会った若いカモシカの親とおもわれる年齢6～7才、牡なら10cm以上の角をもつカモシカの存在が気になりだした。動物生態学に疎いわたくしだが、これくらいの推測は思い浮かぶ。

テリトリーとして一家を構えるならば、その存在が気になるし、棲息を確認したいと思う。

そのためには、やはり、棲息情報を集約して、10頭前後とを思われるカモシカの一団の存在を明確にしたいと思う。

いつも、気になるのは、情報の共有が、かえって特定の影響をカモシカに与えてしまうことだ。

よい例が、奥日光の戦場ヶ原の小田代ヶ原だ。保護のために、防御柵で覆われてしまう。これが、本当の保護なのか？

わたくしは、いつも現地を訪れるたびに疑問に思う。そのようなことが、特別天然記念物であるカモシカのうえに起こってしまってはならないし、棲息域を追い出すことになってはいけない。

人に知られることは、ハイカーがどっと訪れることを意味する。そうなれば、カモシカの棲息空間が荒らされて、カモシカを追い出す結果ともなりかねない。

この山域はあまりにも小さいために、科学が発達した現代では、倍率の高い望遠レンズでカモシカの所在を確認できてしまう。

それは、人にたとえれば、覗かれていることを意味する。そんな環境に棲息するカモシカを静かに見届けたい。

2008年12月14日記

レポート3

「けものみち」

冬至の日、午前中は仕事や野暮用で、時間を自由に使うことが出来ず、午後になって、穏やかな天候に誘われて、「カモシカ」の追跡に出掛けた。

前回のけものみちの入り口を通過して、見当をつけた所から登山道はずれて、林間に分け入った。ほんのわずかで「けものみち」に行き当たった。その道筋を予想するように進むと、あらたに「けものみち」の本線と思えるはっきりとした道筋に行きついた。

明らかに長い間、けものが歩いている道筋で、前項での社長のことばを裏付けるものである。

そのけものみちを辿ると、直ぐにカモシカの糞たまりを見出した。明確な予想の元に、この先がカモシカの棲かであることを確信した。そして、約30分間にわたって人の足跡を残さないように気を配りながら辿ってみた。そこで、さらに2カ所の糞たまりを見出した。その間、カモシカとの遭遇を期待したが、時間が早い(日中)こともあって、姿を見出すことは出来なかった。

カモシカの棲かの核心部には、足を踏み入れずに、そのまま稜線の登山道を目指して足を進めた。登山道に出た瞬間、約10m先にハイカーの姿があるのにドキッとしたが、登山道外から戻った所は見られなかったようでホッとした。

ハイカーと別れて、そのまま鉾山ピークまで進んで休憩を取った。

ラジオから流れる井上陽水のカバー曲「コーヒールンバ」に至福の時を味わった。

下山は、来た道に戻って、日没には登山口に帰った。

この小さな地域に、何頭のカモシカが棲息しているのか。テリトリーとしては、国道293号の南側だけなのか。疑問は次々にわいてくる。

さらに、あの糞を分析機関に持ち込めば、何を食べ、DNA鑑定から個体識別も可能となろうと、夢を膨らませられる。

2008年12月21日記

レポート4

テリトリー

西風の吹く日曜日の午後(12/28)、またカモシカ山域に足を踏み入れた。前回のカモシカみちを辿って、鉾山とゴルフ場を分ける枝尾根を訪ねた。餌場の所在を見極めたいとの思いからである。

カモシカみちはずれて、枝尾根を進んで直ぐに、小さな糞だまりがあった。カモシカみちはずれてからは、この境界には確かな痕跡は無かった。また、稜線をめざして、カモシカの姿を探しながら戻った。

前回登山道へ出た所より、やや東によって登山道に出、鉾山ピークから四阿屋(山頂番屋)へ行き、重機でならされ道筋にカモシカの足跡はないかと、目を凝らしたが、発見できなかった。

さらに、峠(越床峠)へ向かってくだり、その付近のカモシカみちの所在を訪ねた。それは、直ぐに見つかった。わたくしの予想していた通りの所にあつて、自分の気持ちがカモシカの意志とそんなに大きくずれていないことに満足した。

峠から足利病院へ下りながら、水場と食域の可能性を目視した。そのうえで、この足利病院の周辺にその痕跡があるように推察した。そんなことを考えながら、暮れゆく陽を追うように登山口へ戻った。

次のフィールドワークは、やはりカモシカエリアが、国道293号線の北側まで行っているのか、である。

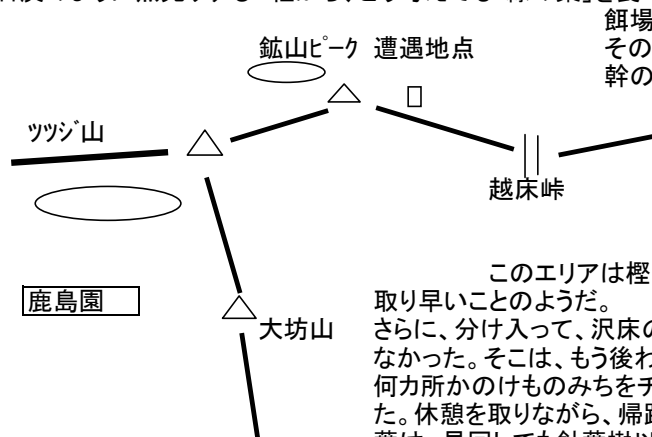
そして、水場の確定である。

2008年12月28日記

レポート5

餌場

寒に入って、またカモシカのフィールドワークに出掛けた。1月11日(日)午後、カモシカの糞だまりで、糞をよく観察し、大豆の大きさで、石炭のように黒光りする1粒から、どう考えても「緑の葉」を食べているとしか推測できなかった。その考えから、以前から



餌場の1つに目を付けていた場所へとけものみちを分け入った。その場所には、網のように張りめぐらされたけものみちがあり、幹の高さ30~40cmの所には、何カ所か動物が体を擦りつけた痕跡も残されていた。これらから、この場所が、カモシカの餌場の拠点の1つであると確信した。

の部分

ただ、緑の葉をつけた樹層は「榊」が優占種であり、この榊の葉を食べた痕跡は見あたらない。

榊の若木の葉は、動物が食べた痕跡があったが、

このエリアは榊は少ない。やはり、糞を分析機関に持ち込むのが1番手取り早いことようだ。

さらに、分け入って、沢床の杉林まで行ってみたが、杉林ではけものみちは見あたらなかった。そこは、もう後わずかでゴルフ場のコースの傍らであった。引き返して、何カ所かのけものみちをチェックしながら、登山道に戻って鉾山ピークで休憩を取った。休憩を取りながら、帰路をどの方向にしようと思案した。冬枯れの中では、緑の葉は、見回しても針葉樹以外では榊と榊しかない。残るはシダとゴルフ場のグリーンの芝のみだ。まさかと思うが、ゴルフ場のグリーンの芝が、カモシカの餌になっている

だろうか。こんなことを思案している内に、30分が過ぎた。

そんな思いを浮かべながら、往路は「鹿島園」に面した南斜面を訪ねてみた。ツツジ山のピークから南西直下の斜面を見下ろすと(大きな楕円部分)榊の群落が見られる。そこに分け入ってみたが、それらしき痕跡は見られず、鹿島園の駐車場近くまで行って、引き返した。このエリアは、ちょっと人が分け入るには急斜面過ぎるし、樹層が低く見通しがきかない。

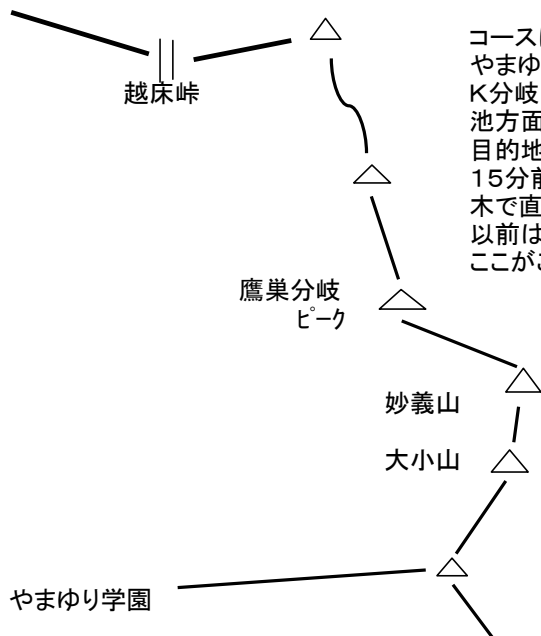
精査するには、マーキングの準備と細引きの用意が必要のようだ。

ツツジ山に戻って、暮れゆく夕日にせかされるように登山口に着くと、陽は秩父の山並みにちょうど沈んだところだった。

2009年1月13日記

1月1日(木)午後、鷹巣集落の路傍に車を置き、やまゆり学園～大小山～妙義山～鷹巣分岐ピーク～越床峠～足利病院と歩いた。好天に恵まれて都心のビル群がくっきりと遠望できた。登山者も午後とあって少なく、ほんとうに静かな爽やかな元旦のハイキングを堪能した。

カモシカのエリアであるこの場所を歩くのだから、注意は怠らないつもりではいたが、まったくその収穫は得られなかった。この山域は、山というにはあまりに低いし浅い。では、里山という表現で言い表せるか、というと全く難しい。わたくし、何事にも素人であるが、この山域は地質学的には粘土質の堆積岩からなる断層の山ではないかと考える。また、植物学的には広葉落葉樹林帯でありながら、榊や檜の広葉常緑樹が入り交じる中に、松の針葉樹がはさまる混交林を形作っていると言えよう。標高は東京タワーより低い、急斜面や一部には断崖をあって、複雑な地形を形作っている。



コースは、鷹巣集落から南に向かって小高い「やまゆり学園」に向かう。やまゆり学園から、東に延びる尾根を忠実にたどる。目指すピークに「NHK分岐」の看板がある。このピークは360度の展望で、特に渡良瀬遊水池方面の展望に優れている。

目的地の妙義山が遠くに見えるが、歩き出すとNHK分岐のピークから15分前後で大小山に着く。東面は30m位の断崖であるが、コナラの木で直接見る事が出来ない。そこから、一旦下って登り返したところが以前は大小山と言っていた三等三角点のある妙義山である。

ここがこのコースの最高点で展望も本当に360度で、ことに日光の山々の展望が圧倒的だ。

日の出には、大勢の登山者でごった返していたのではないかと想像した。今は、1組3人の登山者が休んでいた。

これからは、アップダウンのあるコースで、越床峠方向に向かう。鷹巣分岐のピークでは親子のハイカーが居て、その親から、鉾山の山頂番屋でシシ汁が振る舞われていると話を聞いた。また、以前イノシシにも出会っていると言う。

この人達と別れて、越床峠までに顕著なピークが二つあるが特に名前がついていない。下っては登りを繰り返して、越床峠についた。

同行の妻に、ここのカモシカみちを見せて、その存在をアピールした。

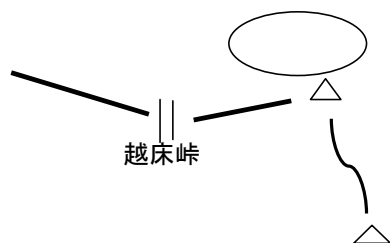
峠からは南面の足利病院に下り、鷹巣集落の路傍に駐車した車まで戻った。

まだまだ、陽は高いが、今日1日、新年のスタートはこうして始まった。

2009年1月3日記

レポート6

推測



1月24日(土)午後、今度は越床峠から東側へフィールドワークに出掛けた(楕円形の部分)。今までは、全て鉾山ピークの西側のみであった。今回は、その西側の経験から当たりをつけて、峠から直ぐにカモシカみちに入った。雨後のこともあって、カモシカの真新しい足跡も何力所かにあって、それを追うようにカモシカみちを辿った。

その最後の到達点で、コケが獣に食い荒らされているところに行き当たった。何というコケであるか知らないが、今までも不自然に登山道に落ちていることがあって、一つの疑問点であった。仮説に過ぎないが、このコケをカモシカが食べていないか。カモシカの糞から緑の葉と予想していた

が、冬季のカモシカの餌はこのコケではないか。

このコケが主食であるか、副食であるか、また見極めがつかないが、そうであれば登山道に落ちていたコケの塊に納得がゆく。

そんな推測をしながら登山道に戻って、踏み固められた登山道の傍らを注視すると、何力所かにそのような痕跡があった。今後の課題であるが、このコケの分布と明確な証拠を見つけたさなければならない。

確実にカモシカがいる。そろそろ本物に会いたくなった。

余談であるが、けものみちを辿ることに、ここ3～4年の間、冬場の地図に登山道の無い山を歩いてきた経験が役立っている。

2009年1月24日記

付記

「ヒュー」

登山道に戻って時、下の方から動物の鳴き声がきこえた。カモシカが、どのように鳴くのか、知らないため、もしやという疑問点とした。1月27日、町の図書館にいて、野生動物の鳴き声を収録したCDがあるか、訪ねた。

在庫目録で検索してもらって、何らかの理由でそのCDが壊れているという。では、「カモシカ」で文献検索をしてもらったら、数冊の本があるという。その内の3冊を出してもらった。館内で通し見た限りでは、わたくしの聞いた鳴き声とは違うようだが、カモシカも声を上げて鳴くようだ。だとしたら、わたくしが、カモシカに観察されていたのではないか。

変な奴がいなくなって、安全になった、というカモシカの掛け声ではなかったか。「知識がない」と言うことが、こういう失態をおこす。明らかに、カモシカの目には、わたくしの存在が写っていたのではなからうか。

気にはなるが、これも一期一会の巡り合わせだ。

2009年1月27日記

建国記念日の祝日、朝の内は好天であったが、だんだん雲が広がり、今にも降り出しそうにどんよりとしてきた。天気情報では、日中は降らないと言うことで、午後になって一応雨具を用意して出掛けた。

前回のコケの採食痕の場所から、前回とは逆に精査しようと思い、現場について驚いた。コケがほとんど食い荒らされた状態になっている。さらに先に進んでコケの分布を調べたが、あの場所以外では採食の痕跡はない。

このことをどう理解すればよいのだろうか。その場所のコケを食べ終えたから、次の群落に移る前なのか、あるいはそこで食べ終わりなのか。

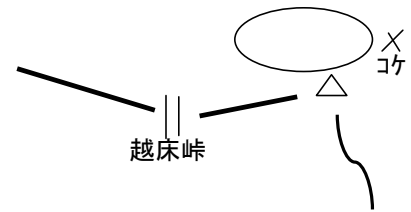
そのコケの場所から、カモシカみちへ下る途中で、犬用の手綱を1本発見した。

飼い犬か猟犬か、推測するにカモシカを追って、飼い主の手を振り解いて追って行ったのではないだろうか。人が歩いた痕跡が無いことから、犬だけが何かを追って、手綱が首輪からはずれたものと思われた。カモシカの天敵は、やはり「犬」のようである。

さて、なんなくカモシカみちに出逢って、カモシカのサインを探しながら越床峠につながる1本のカモシカみちを辿った。残されたサインは、採食痕、幹の角突き跡、溜糞で、その糞の上には新しい糞が重ねられていた。越床峠から旧国道へ出て、佐野市側を丹念に探したが、カモシカのサインは見あたらなかった。今までの経験から、標高150m以下ではカモシカの痕跡は全くなくなる。

それゆえに、カモシカが生きるために必要な水場は、何処なのか。また、縄張り意識の強いカモシカにとって、東西の溜糞の距離1500mは、生活圏としての面積として考えて良いのか。

疑問は、次から次へとわいてくる。今回の収穫以上に、問題点が発生する。



2009年2月12日記

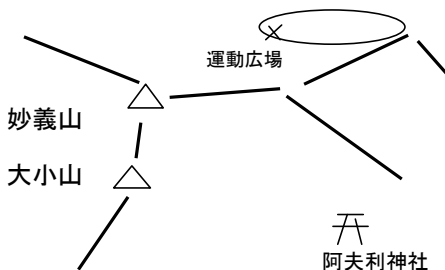
カモシカの生態については、昭和40年代前半にほとんど解明された。昭和30年代後半から各地で始まった飼育の失敗を通じて、人工飼育の技術が確立されたからだ。

そのことから、「大坊山系のカモシカ」は縄張り意識の強い種であることから、カモシカの生息域で知られる足尾の庚申山に似た環境の、この山域をテリトリーとして住み着いたと推測できる。カモシカ1頭1頭が、縄張りを持つことで、1頭当たりのエリアが何平方メートルであるかは別にして、奥山への林道建設や砂防ダム工事で、そのエリアが脅かされる状況と、カモシカ個体の頭数の増加が、ここを棲息域として来たように思う。単純には、縄張りの棲かを求めて若いカモシカが住み着いたと言うことである。

あるハイカーから、「2年前(平成19年)の早春に、通称赤見尾根でヤギの糞？を見た」と言う証言を得た。

これは、カモシカの縄張り意識からして、別のカモシカの個体の可能性を示唆している。妙義山を中心として、別のカモシカが棲息していることを意味する。願わくは、そのカモシカが順調に育っていて欲しい。

ということで、通称赤見尾根を目指した。2月28日(土)の午後になって出掛けた。阿夫利神社駐車場から直接赤見尾根に通じるコースを取り、けものみちをチェックしながら進む。何本かのけものみちはあるが、カモシカみちとは断定で出来ずに、赤見尾根に至り、妙義山頂とは反対方向の西場富士方面へと進路を取る。けものみちがある度に、試みに入ってみるが、決定的な印が無く、赤見市沢の墓地まで行った。この間、数本のけものみちを確認したが、どれもカモシカを臭わせるものは無いと判断した。



また、戻りながら丹念にチェックしつつ、往きで帰りに確認しようとした赤見尾根最初のけものみちに入った。それを進む内に、どうもカモシカみちだろうと判断できる雰囲気になってきた。その到達点は、名付けて運動広場とする。約2m四方の片隅にやや太い幹のヤマザクラがあり、空を見上げると明るい空間のある広場で、カモシカが縦横に駆け回った足跡がある。

また、5m位離れた場所にも、畳半畳ほどの広場があり、その回りには何カ所もカモシカの糞があった。その空間は、わたくしでさえ、このヤマザクラが咲くときに、ここで大の字になって、しばし憩いたいと思う所だ。

ハイカーの記憶から2年が経て、現実にかモシカが棲息している。同じカモシカであるか、代が代わってのカモシカであるかは別にして、どうにか棲息環境が保たれて来たのだ。週末毎に50人、100人単位でハイカーの訪れる場所なのである。

カモシカの縄張りとしては、大坊山系のカモシカとは別個のカモシカと思われる。縄張り意識と縄張りの間に緩衝帯が存在するか、この妙義山系のカモシカの縄張りを特定する事も、大事な観察目標となった。赤見尾根に戻って、山頂をカモシカの痕跡を求めながら踏んだ。春霞のかかった夕暮れの風景を見渡しながら、2年の空白が埋まったことに満足した。

2009年2月28日記

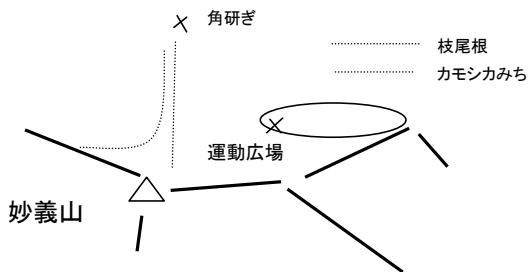
参考文献 カモシカ 一氷河期を生きた動物—
ニホンカモシカ

大町山岳博物館編
宮崎 学

信濃毎日新聞社
あかね書房

陽春の光に誘われて、3月15日(日)の午後に妙義山系のカモシカを訪ねた。前回のレポートにも示したが、大坊山系とは別のカモシカと思われるからだ。とするならば、縄張りの境界線があるのだろうか？

この疑問に答えを見つけるべく、野外観察に出掛けた。赤見尾根に達して、前回とは反対のコース取りにした。直ちに運動広場に行き、2週間前と変化無いことを確認した。その足を沢筋の林床に水の流れがないか探した。雨が降るたびに僅かに流れが出来る沢筋のようで、水場の機能は無理であった。カモシカのマーキングを探しながら、カモシカみちに至り、枝尾根の道が四方に拡散する所で、カモシカみちの探索をあきらめた。それは、縄張りのど真ん中にあるのだから、今回の観察目的と違う。そのまま、枝尾根から稜線の赤見尾根にとって返した。赤見尾根を山頂方向にとり、山頂から北に延びる枝尾根に踏み入れた。養鶏場へ伸びる枝尾根で、好事家のハイカーが辿ってとみえて、青テープのマーキングが施されていた。その印もつけて、さらに標高を落として、もうこの辺までかと立ち止まって、振り返ったところに、角研ぎの印が幹にあるではないか。



やはり、妙義山系のカモシカは、ここまで足を伸ばしているのだと確信した。この先は、標高が落ちることから、ここで引き返した。

先の好事家の目印を辿る内に、これは、本来カモシカみちではないか、と思い始めた。あるいは、この好事家も、カモシカを探して歩いているのではとも思った。いずれにせよ、好事家のマーキングに導かれて、山頂から越床峠につながる登山道へ出た。

登山道で妙義山頂へ出、賑やかな集団のハイカーとの挨拶をそこそこに、定位置の休憩場に陣取って、すっかり春めいた両毛の大地を眺めた。きれいな緑色の麦畑が、夕日に照らされて鮮やかである。木々の冬芽が割れだして、早いものは萌葱色の新葉が出だした。寒さに震えながらの休

憩だった前回までが、嘘のように暖かく気持ちがよい。ヤマツツジも何力所かに咲き出している。

そんな思いをかさねながら、帰路を思索した。結果は、また赤見尾根を忠実に辿って、山頂東側のカモシカの行動範囲を特定することにした。その結論は、推測の域を出ないが赤見市沢分岐から城山(じょうやま)への登山道より東側には行っていないと思われる。標高が低くなり動物の痕跡が消えるからだ。西場集落の民家の傍らに出て、まだ春の陽は暖かった。

2009年3月15日記

人は山菜と称して木の芽や草の葉または軸を食べる。草食の動物にとっても、この時節の新芽や新葉は、美味しい好物に違いない。カモシカにも、それは当てはまる。カモシカが何を食べているか、だが文献的にはオオカメノキが好物らしい。オオカメノキはムシカリの別名でスイカズラ科に属する。大坊山系にも妙義山系にもムシカリはあるが、それだけでカモシカの胃袋を満たせるだけの量はない。

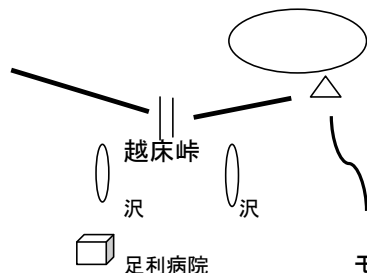
芽吹きの時節になって、1ヶ月ぶりに大坊山系のカモシカを追ってみた。3月28日(土)の午後のことである。フィールドとしては越床峠周辺である。すっかり新芽が萌えだし、日溜まりのヤマザクラが何本か咲いていて、山は春の装いである。まず、峠の手前から、以前から推測していた沢筋へ、けものみちを辿った。杉林の中のけものみちは、つづら状になっていて、歩行は思いのほか難渋することなく水のある沢床へ出た。そこは、イノシシのぬた場で、僅かにしみ出した水が流れを作っている。わたくし自身は、この沢水を飲もうという意欲がわくものではなかった。ゆえに、本当に動物が採水しているかは疑問に思えた。

そんな感想を持ちながら、下流へと進んで林道に出、また峠を目指した。峠からは東側のピークへ進み、北に延びる尾根を佐野ゴルフ場方向へと進路を取る。レポート6のなかで、コケで課題を抱える枝尾根である。所々にあるヤマツツジの花の朱色が、尾根歩き目の楽しませてくれる。爽やかな天候に、国道の上まで足をすすめたが、この間カモシカの痕跡は見つけられなかった。コケは、レポート6で記した部分以外は、変化がなかった。

その尾根を引き返して、もう二度も通っているカモシカみちに分け入った。ここでも、モミジイチゴの葉が出ていて、冬場に比べると春の燃え立つ緑が間近に迫っていた。その光景に促されるように、岩場や雑木林を丹念に観察したが、新しいカモシカのサインは見つからなかった。やがて峠に出て一服した。

下山は、また峠から往きに下った沢と反対方向の沢床に降りようと、けものみちに進入した。櫛の生い茂る樹間を分けながら、意図もたやすく、いつも通る峠と足利病院間の登山道に出た。その登山道脇を流れる沢筋は、間伐材を利用した護岸工事の施された流れで、初回に通った時に水場と目星をつけた所だ。ここの水量ならば動物たちの採水に十分である。残るは、カモシカが水場として利用している現場を押さえることである。そんな想いで下山した。

カモシカの一日は、日の出に始まって菜食し、昼はのんびりと反芻しながら安全な場所で過ごして、午後遅くにまた菜食して、峠に帰る生活と文献にある。行動パターンが大きくずれない限り、この峠付近の夕刻に出会える機会があるのではないかと、推測している。そして、昼を過ごすのは、今回も通ったカモシカみちの岩場ではないかと、目的地を絞ってみた。

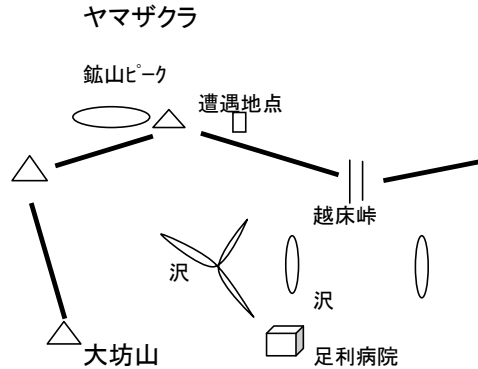


実は、もう何本ものカモシカみちを通るが、その後2~3週間の間、そのみちからカモシカの痕跡が消える。縄張り意識の強いカモシカは、人の臭いを敏感にかぎ分けているとしか思えない。それゆえ、ここと思える場所に、カモシカの個体が見あたらぬ。氷河期の生き残りといわれるカモシカの生存能力は、こうした敏感な行動にも現れるようだ。営々と種の存続を続けてきたカモシカの本能が、わたくしの能力を超えて、姿を見ることが出来ないようだ。

それでも、これからの季節は、先にも記したが、美味しい好物がたくさんある時で、カモシカの本能も、気がゆるむのではないかと推測している。そして、わたくしの身も、若葉が隠してくれる条件が整ってくる。もちろん、カモシカの行動も、冬以上に活発になるであろうから、出会うチャンスは、これからであろうと思っている。

2009年3月30日記

レポート11



前回の水場探訪から2週間を経て、その間ほとんど雨が降らず、あの2つの沢は涸れているのでは、気になっていた。そこで、4月12日(日)の午後に出掛けた。わずか2週間の経過ではあるが、山はすっかり新緑を迎え、ヤマザクラが満開で、数がこんなに有ったのかという位に見事に花の山を形作っていた。やはり、沢は涸れていた。それでは、カモシカの水場は何処になるか。そんな発想を脳裏に越床峠に着き、今回は鉢山ピークを目指した。鉢山ピークで山肌の変化を観察し、カモシカ観察の原点であるカモシカみちに分け入った(レポート3, 4)。カモシカが歩いている痕跡は明確であるが、いつ頃歩いたかは推測不可能である。カモシカみちの分岐で、1本上に行くコースを摂ったら、もう登山道に出ていた。そこで、角突きの手まで行っ

て、またカモシカみちに進入した。このコースもカモシカが歩いているという実績のみで、新たなシグナルはなかった。

ただ、このコース溜糞には、4~5日前と思われる糞が積み重なっていた。それが唯一の収穫である。若葉の林は、視界が無くなったので、思い切って峠とおぼしき場所に近づいてみた。しかし、これもコース取りが1本上向きだったようで、まもなく登山道に出てしまった。そのまま、鉢山ピークの見晴らしで、本来の水場を探して俯瞰した。

鉢山ピークから南に足利病院に向かって小さな尾根があり、その尾根に、これまたヤマザクラが並んで咲いている。そのヤマザクラを目標に番屋小屋の所から、けものみちを進んだ。ヤマザクラからヤマザクラへと渡りながら、その小さな尾根の西側下部に細流があって、左岸にはくっきりとカモシカの足跡を見出した。昨日か今朝かにつけられた足跡のようで、予想が正しかったことに安堵した。

その沢からほんのわずかで林道に出て、また歩くこと2~3分で足利病院の裏手に出た。ヤマザクラは、樹下から上空を眺めるよりは、上から、または遠くから眺める方がはるかに美しい。ヤマザクラに堪能した半日だった。

2009年4月13日記

レポート12

課題

4月中旬に体調を崩して、約2ヶ月にわたりフィールドワークを中断した。やっと、体力は元に戻っていないが、気力が湧いたので、梅雨の晴れ間を利用して、大坊山系のカモシカを追ってみた。6月13日の土曜日の午後のことである。天気情報では、夕方には雷雨が予想されていて、雷注意予報は関東一円に出ている。

幸い雷雨にはならず、ヤマザクラから2ヶ月の経過は、山を濃緑の木々に変えていた。コースは「レポート3」で記した通りに歩き、登山口である大山祇神社駐車場から山頂を目指す。神社の裏手から、イノシシのけものみちが何通りもあって、動物の活動の盛んなことを知らせてくれる。山頂までの足取りは重く、ゆっくりと足を進めた。山頂からツツジ山ピークへの登り返しも、体が慣れないこともあって、気持ちとはちがはぐである。

ツツジ山ピークを越えて、直ちにけものみちに進入した。2ヶ月ぶりの山肌の感触を足の裏に感じながら、カモシカが盛んに活動していることの足跡を縦横に見つけることが出来た。そして、溜糞では、1~2日前のものと思われる新しい糞がもられていた。

これらの、カモシカが元気で過ごしていることの証を見て、わき上がるエネルギーをもらったような気がした。

注意深くけものみちを辿ったが、それ以上の発見は得られなかった。緑に覆われた樹間は、葉のない冬季と比べれば、全く見通しがきかない。そのなかで、角突きの手跡や食痕を見つけだすのは、考えていたよりも困難なようだ。今後、これらの課題を、どのように克服できるか、宿題を突きつけられた。

水場から辿る方法と、餌場を突き止めて、そこから足取りを追う方法が考えられるが、いずれであろうと、1歩1歩の体力が最優先である。そんなことを頭に浮かべながら、登山道に戻って、鉢山ピークへ行って休憩した。眼下に移動する重機を眺めながら、あれくらい大きな物体で有れば、見届けるのも簡単であると比較した。

帰路は、登山道を忠実に辿って、ツツジ山から大坊山、さらに登山口の神社に戻った。時間を掛けた割には行動範囲が狭かった。これも、2ヶ月のブランクが有れば、止むを得ないことであろう。登山口で、着ていた物をすべて着替えて帰宅した。これも、夏山の行動だ。

2009年6月13日記

レポート13

再訪

朝日新聞7月10日(金)版 青鉛筆に『秋田県小坂町の十和田湖畔で9日朝、近所に住む男性から「ツキノワグマがカモシカを襲って、くわえたまま山に入ってしまった」と地元警察署に通報があった』と載る。

カモシカとツキノワグマの食べる木の葉や山菜、木の実、ある部分共通の主食であろうと、カモシカにとってツキノワグマが天敵となろうか? そんな疑問を抱きながら、4ヶ月ぶりに大小山系のカモシカの痕跡を求めて(レポート9)、7月11日(土)の午後に出掛けた。

4月に体調を崩してから、どうも体のキレが悪い。体が重いというか、足の1歩が出ないというか、足取り重く阿夫利神社の駐車場から、西尾根の赤見尾根をめがけて登り出す。直ぐに息が上がって、岩場の見晴らしで休息を入れ、赤見尾根から「運動広場」と名付けた現場へ直行する。特に変化無く、運動広場は静寂の中に佇んでいたと表現出来よう。そこから、カモシカみちを辿って、赤見尾根を目指す。木々の間や岩場にカモシカの痕跡はないかと探すが、1~2週間前の糞がカモシカみちに残されていたことと、午前中か昨日につけられた足跡を3~4ヶ所で見つけることが出来た。ここのカモシカも、無事に冬を越して、夏を生きていることの証を見出し、クマに出逢うなよと祈った。

赤見尾根から山頂直下の北尾根に進路をとって、ヤマツツジの小枝が不自然に5本折られている場所を発見した。人の手で折られたにしては、折口が鋭く折られていないし、もしやカモシカがくわえて折ったのかと推測も出来る。でも、葉を食べるでもなく、小枝を折るだけの行為をするか、実際の現場を見ていないので、断定は控えよう。

北尾根から東尾根に続くカモシカみちを通過して、東尾根の登山道に出て山頂に立ち、建設中のすっかり全線がわかるようになった北関東自動車道の道筋を眺めながら、休憩をとった。冬場ならば、もう「あしかがフラワーパーク」のイルミネーションが輝く時間であるが、夏場はまだまだ明るい。夕空にツバメが飛び交う中を、登山口の阿夫利神社の駐車場に戻った。

2009年7月11日記

さすがに暑い盛りは、この山系に近づこうとは思わなかった。どうにか秋めいて、涼しいかなと思うと、日中はまだまだ暑く、まごまごしている内に、9月も終わりになろうとしてきた。前回の山行から80日近い日数が経過した。

涼しい北東の風が吹き抜ける9月27日(日)の午後に、どうにか重い腰を上げて、カモシカと出逢ったエリアに足を運んだ。気分も重く、体も重い中で、大山祇神社の登山口から大坊山を目指し、一旦下ってからツツジ山へ登り返した。何とか歩けるようで林野庁が何の目的で測量したのかわからないが、その為にきれいに刈り払われた登山道を辿って、カモシカみちに分け入った。4月のヤマザクラが咲くとき以来である。カモシカみちは、しっかりとついていたが、このコースの第2の溜糞は全体に白いカビがはえて、この季節としてはおそらく1ヶ月以上は、新たな脱糞がなかったのであろう。さらに、第3の溜糞はひからびて消滅しそうであった。

この2点から、テリトリーの変化か、カモシカの恋の季節で、行動パターンが変わったのであろうと推測した。そのため、このエリアを約1時間にわたり歩き回ったが、新たな成果は発見できなかった。登山道に戻って、鉢山ピーク下の展望の利く岩場で休憩し、次の行動を考えた。思案そこそこに、原点に戻ってカモシカと出逢ったところから、始動することにした。山頂番屋は、誰もいず、5ヶ月余の空白が現実迫ってきた。そして、その時(カモシカと出逢った)、カモシカが進行した方向に足を進めた。そのには、第4の溜糞があるが、ここもひからびて、一部には白いカビは生えかけていた。ここは、冬場の罅への通り道で、最も貴重な場所ではないかと推測していた。

ここでも、縄張りを放棄するほどの変化があったのだろうか。やはり、あまりの空白は、野外観察では大きな欠陥を招くことになった。反省とともに、越床峠のカモシカみちを訪ねた。ここも、しっかりと歩かれていて、目立った変化は感じられない。カモシカみちに分け入り、交差する道を、旧国道に沿う下りの方向に進んでみた。上の道は、もう3度も訪ねているので、新発見はないだろうと踏んだ。

下の道は、直ちに杉林になり、小さな沢に下っていく。梅雨時から夏場の細流を利用した水場への道のような。そして、それは、旧国道に沿う細流につながっていた。以前、旧国道から丹念にカモシカの足跡を探していたのだが、その時は見落としていたようだ。新たな成果に満足して、旧国道のアスファルトの道から、越床峠を越えて、登山道に落ちている山栗を拾いながら、足利病院から大山祇神社の駐車場へ戻った。

2009年9月27日記

